

## 1 インタビュー

# “AugmentedAutomation”による真のDX実現

持続的成長に向けた6本柱の中核事業の1つとして、全社連携を基軸にAIロボティクスビジネスを推進するNTTアドバンステクノロジー（以下、NTT-AT）。本ビジネスを牽引するAIロボティクス事業本部長の高木康志取締役に最近の状況と今後について伺った。

### 日本の業務課題と、解決策としての“AugmentedAutomation”によるDXの推進

—はじめに、6本柱の1つとして、注力されているAIロボティクスビジネスの最近の状況からお聞かせください。

**高木** NTT-ATは、事業拡大に向けた6本柱の1つとしてRPA「WinActor®」を核としたAIロボティクスビジネスを積極的に推進しています。デジタル技術によって業務やビジネスの変革を行うデジタルトランスフォーメーション（DX）の重要性が叫ばれ、それを実現するソリューションとしてRPAが注目を集め、大企業を中心に導入が拡大しました。NTT研究所のR&D成果を、NTT-ATが2014年1月に商用サービス化したWinActorは、2020年10月に導入企業数5,500社超、国内シェアNo.1を誇るRPAに成長しました。RPAが得意とする定型業務の自動化はDXに向けたSTEP1と定義され、これはかなり浸透してきました。さらに日本企業の働き方改革の推進とコロナ禍によるオフィス業務のさらなるDX化が急速に進んできており、AIロボティクスビジネスも次のステージに入ったと捉えています。

—コロナ禍でどのような課題が浮き彫りになり、それを解決するにはどんな取り組みが重要だとお考えですか。

**高木** 日本企業の労働生産性は相対的

に低く、長い間解決されないままでした。その原因は様々ですが、「電子化の遅れ」「縦割りシステム」「セキュリティ対策の遅れ」といったものが挙げられます。この3つは、日本でテレワークがなかなか進まない主たる要因でもあります。この課題を解決するためには、RPAとAIを組み合わせるだけでなく非定型業務まで自動化領域を拡大し、さらに認証や証跡といった様々なセキュリティ技術も組み合わせ、これらをワークフローという一連の流れとして実現することで業務全体のDXを実現する“Intelligent Process Automation”の考えが重要です。すでにこれを実現する様々な技術や製品が使えるようになっています。この会社業務全体の自動化を推進するプロセス全体のデジタルライゼーションがSTEP2です。そしてSTEP3は、サービス連携



NTTアドバンステクノロジー株式会社 取締役 AIロボティクス事業本部長 高木 康志氏

を中心とした社会全体に影響を与えるDXの実現です。ブロックチェーンやクラウドマッシュアップ技術などを活用することで、サプライチェーン全体の自動化へと拡大し、社会全体のDXへと発展させていくことができると考えています。このような「RPAを中心として様々なツールと連携させ、社内外のデ

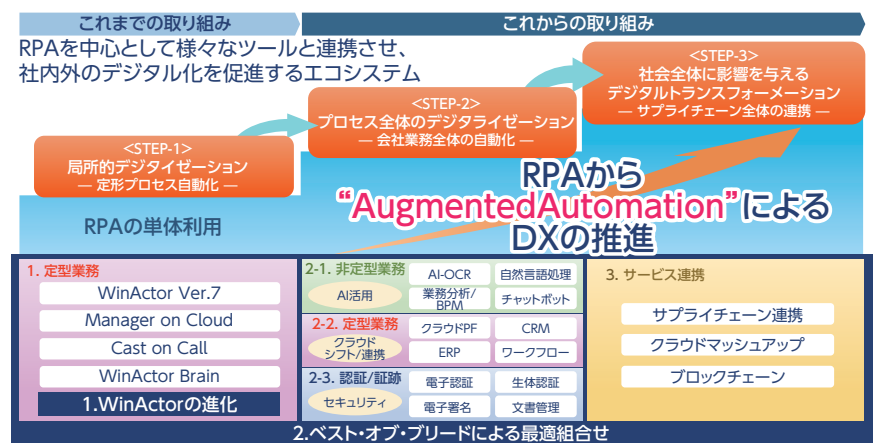


図1 DX実現に向けた3ステップ

デジタル化を促進するエコシステム」を、我々の造語ですが、拡張自動化「Augmented Automation」と名付け、今後は特にSTEP2とSTEP3に必要なソリューションを提供していきます。

## WinActorの進化とベスト・オブ・ブリードによるDXの拡大

——詳細は本インタビューに続く各論記事でご紹介しますが、現場フレンドリーなRPAとして、WinActorそのものも進化していますね。

**高木** WinActorのラインアップとして、ノードロックやフローティングといったロボット本体、そしてオンプレ型とクラウド型から選択できるロボット管理機能、さらに新たなアプローチとしてのクラウド型ロボットサービスやAIによる拡張機能等、“現場フレンドリー”を追求し、より使いやすく進化させてきました。特にRPA本体は初めて一から作り直し、本年1月にWinActor Ver.7としてリリースしました。UI/UXを刷新したほか、シナリオ作成の容易化や、各種連携機能の強化、シナリオの言語非依存化などの多言語化（グローバル化）を図りました。

また、クラウド型の管理サービス「WinActor Manager on Cloud」やクラウド型ロボットサービス「WinActor Cast on Call」、AIによる拡張機能「WinActor Brain」など、クラウドサービスについても進化させてきました。そのなかには、シナリオ作成をより簡単に、より効率的に行うための支援ツール「WinActor Brain Cloud Library」や、ユーザーとWinActorとの対話による共同作業を実現する「WinActor Brain NaRuKami」があります。

——STEP2/STEP3に必要なソリュー

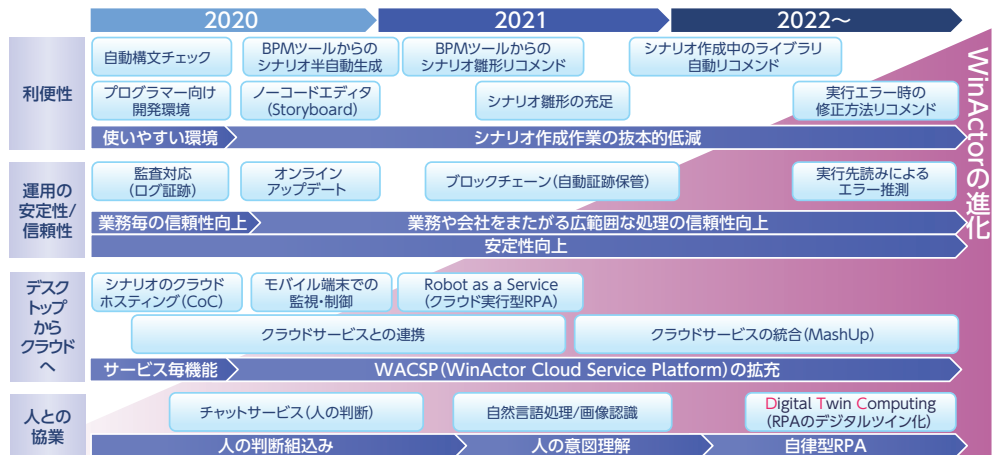


図2 WinActorのロードマップ

ーションの提供に向け、どのような点に注力されていますか。

**高木** WinActorはオープンイノベーション戦略をとっていますので、特定の技術や製品を囲い込むことはせず、世界中の優れた技術と自在に組み合わせることでお客さまの最適なDXを実現していただく、すなわちベスト・オブ・ブリード (BoB) を目指した取り組みを行っています。具体的には、外部のアプリケーション等との連携を実現するためのTPP (テクノロジーパートナープログラム) や、1,600種類以上のサンプルシナリオ・ライブラリの提供、WinActorシナリオセンタにおける高度シナリオ開発支援、ホームページ (<https://winactor.biz>) でのチュートリアルや優良事例共有等です。モノづくりからコトづくりへのシフトと同様に、製品提供から付加価値づくりのためのソリューション提供へのシフトを基軸に、WinActorとさまざまなDX技術との相乗効果により、お客さまのDX推進を支援していきます。具体的な組み合わせ事例については、後続の各論記事の中でいくつかユースケースを含めてご紹介します。

## 自律型RPAの実現を視野に、進化し続けるWinActor

——WinActorの進化について、今後のロードマップをお聞かせください。

**高木** WinActorは、図2に示すように4つの軸で今後も発展させていきたいと思っています。1つは、WinActorの最大の特長である“現場フレンドリー”を実現するための利便性のさらなる向上です。象徴的な機能の1つとして、シナリオ作成をさらに簡単にするノーコードシナリオ開発環境が挙げられます。また、運用の安定性/信頼性として、オンラインアップデート機能やブロックチェーン (自動証跡保管) 機能の提供、さらにはデスクトップからクラウドへの取り組みを強化・加速し、現在サービスごとに提供中の各種機能をプラットフォーム「WinActor Cloud Service Platform (WACSP)」上に統合する予定です。人との協業についても、人の判断を組み込むためのチャットサービスや、人の意図理解に向けた自然言語処理/画像認識、さらにNTT研究所と連携しつつ自律型RPAとしてのデジタルツイン化 (Digital Twin Computing) にも取り組みたいと考えています。

——最後に、今後の抱負を一言……。

**高木** WinActorの機能高度化に加え、パートナーアライアンスに基づくエコシステムでAugmentedAutomationによるお客さまの真のDX実現に貢献したいと思っています。

——本日はありがとうございました。